

マソラ研究

－反転のヌン－

小林 洋一

ヘブライ語聖書, *Biblia Hebraica Stuttgartensia* (以下 *BHS*) に出てくるマソラの特異な記号の一つに ׀ がある。これは反転したヘブライ文字 ׀ (ヌン) (に似ているもの) の上に点がつけられたものである。これは、通常、「反転のヌン」(Inverted Nun または Inverted Nuns) と呼ばれる。日本語では「逆転のヌン」¹, あるいは「裏返しのヌン」² と呼ばれたりもする。ヘブライ語では, מְנוּחָה מְנוּחָה と呼ばれ³, その意味は「分たれたヌン (の複数形)」である⁴。ただ, 単数形のヌンを使って「反転のヌン」を意味するヘブライ語 ׀ הַפּוּכָה と呼ぶ場合もある⁵。

この反転のヌンは、ヘブライ語聖書に合計 9 回出て来る。即ち、民数記 10

-
- 1 エルンスト・ヴェルトヴァイン (鍋谷堯爾・本間俊雄訳) 『旧約聖書の本文研究－「ピブリア・ヘブライカ」入門－』(日本基督教団出版局, 1997), 37-38.
 - 2 R. ウォンネンベルガー (松田伊作訳) 『ヘブライ語聖書への手引き－旧約テキスト批判入門－』(ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1992), 22.
 - 3 但し, A. Dotan, “Masorah,” in *Encyclopaedia Judaica XVI Ur-Z* (Jerusalem: Macmillan Co. 1971), 1408 では, ׀ מְנוּחָה がアラム語式に ׀ מְנוּחָה と表記されている。
 - 4 S. Z. Leiman, “The Inverted Nuns at Numbers 10: 35-36 and the Book of Eldad and Medad,” *JBL* 93 (1974), 349 では, ヌンが複数形ではなく ׀ מְנוּחָה と単数形で表記されている。
 - 5 Cf. C.D. Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible* (New York, NY: Ktav Publishing House, Inc., 1966), 342. S. Frensdorff, *Das Buch Ochlal W’ochlah (Massora)* (New York: KTAV Publishing House, Inc., 1972), § 179. なお, Page H. Kelley, Daniel S. Mynatt and Timothy G. Crawford, *The Masorah of Biblia Hebraica Stuttgartensia: Introduction and Annotated Glossary* (Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1998), 34 では, *Nunim haphukah* とヌンを複数形にしているが⁵, *Nun haphukah* とヌンを単数形にすべきであろう。

章35-36節の2回、詩編107編21-26節の各節（6回）および40節の7回の合計9回である⁶。但し、正確な聖書箇所に関しては異論がある。例えば、写本家のベン・ナフタリ家系に属するラビ聖書 (*Biblia Rabbinica*)⁷ では、*BHS* のもとになっているベン・アシュル家系に属するレニングラード写本とは異なり、詩編107編の反転のヌンの箇所が23-28節と40節となっており、少なくとも詩編107編の反転のヌンに関しては、二つの伝承の存在が確認できる⁸。

数に関しても、上記箇所の反転のヌンの他に、ラビ聖書では、創世記11章32節の側欄のマソラ・パルバに **נון הפוכה**（反転のヌン）の注記があり、異なる伝承の存在を伺わせる⁹。これは、創世記11章最後の32節に記されているテラの死が、12章はじめのアブラ(ハ)ムのハラン出立の前に来るのは年代的整合性に欠けるので、11章32節は、アブラ(ハ)ムの出立の後に移動されるべきとの考えを示すものである。創世記11章26節によれば、アブラ(ハ)ムは父のテラが70歳の時の子であり、アブラ(ハ)ムがハランを出発したときは75歳であった(12:4)。11章32節では、テラの生涯は205年と記されているので、テラはアブラ(ハ)ムがハランに出発した60年後に死んだことになる。

この章句に関して、サマリア五書では、11章32節でのテラの生涯は145歳であったと記され、少なくともアブラ(ハ)ムは父テラが死んだ後にカナンに

6 レニングラード写本 [*The Leningrad Codex: A Facsimile Edition* (Michigan, Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 1998)] では、詩107の反転のヌンとその上の点が確認できるが、民10:35-36の場合、一見して反転のヌンのようには見えない。その上ヌンの上にあるはずの点も確認できない。

7 *Biblia Rabbinica: A Reprint of the 1525 Venice Edition Vol. I-IV* (ed. Jacob Ben Hayim Ibn Adoniyah) (Jerusalem: Makor, 1972).

8 I. Yeivin (tr. E. J. Revell), *Introduction to the Tiberian Masorah* (Masoretic Studies 5; Missoula, Montana: Scholars Press, 1980), 46によれば、多くの西方マソラの写本ではトーラーの中の民数記の反転のヌンはあっても、詩107にはそれが見られず、たとえあったとしても、位置が一致していないということである。

9 創11:32の反転のヌンについては、Cf. Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 345. E. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible* (Minneapolis, MN: Fortress Press, 1992), 54, n.34.

向かったことになっている¹⁰。ヤハウリスト資料あるいは祭司資料の差異に、その解決を見いださない古い注釈では、テラの死がここにあるのは、アブラ(ハ)ムがハランを離れた後、二度と父に会うことがなかったことを示すため¹¹、あるいは高齢の父を一人で残してカナンに出発するという批判がアブラ(ハ)ムに行かないようにするため等の解釈がなされている¹²。

この反転のヌンの起源は紀元2世紀に遡るとされる。但し、その場合、ヘブライ文字「ヌン」ではなく、単純な「点」の形で示されていた¹³。紀元2世紀のR. シメオン (Simeon) の名前が出て来るユダヤ教の民数記の注解書「スイフレ (Sifre)」84では民数記10章35-36節は適切な場所にないので、その前と後に点が打たれている (נקוד), と語られている¹⁴。但し、この点の解釈に関しては反転のヌンとは異なる見解があったことも示されている。

「その箱 [アーク]¹⁵ が出立するとき...」 [民10:35]。それ (この章句) の上と下 [始めと終わり] には点があり、これが正しい場所にないことを示している。ラビが言う。「それは、ここに [נוכח], この章句それ自体が巻物を形成しているためである [35-36節それ自体が独立した書を形成している=即ち、反転のヌンとは異なる見解]」¹⁶。...R. シメオンは言う。「この書かれた版で、それ (この章句) の上と下に点があり、

10 August Freiherrn von Gall (heraus.), *Der Hebräische Pentateuch der Samaritaner* (Gießen: Verlag von Alfred Töpelmann, 1918), 18. 使徒7:4でも、アブラハムのハラノ出立は父テラの死後となっている。

11 Cf. C. F. Keil and F. Delitzsch (tr. James Martin), *Biblical Commentary on the Old Testament Vol. I; the Pentateuch* (Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, no date), 181.

12 Cf. A. Cohen, *The Soncino Chumash: The Five Books of Moses with Haphtaroth* (Hindhead, Surrey: The Soncino Press, 1947), 55.

13 Cf. Dotan, "Masorah," 1408.

14 Cf. Yeivin, *Introduction to the Tiberian Masorah*, 46. Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 342.

15 [] は筆者の補足を示す。

16 その場合、民数記は、第一巻(1:1-10:34)、第二巻(10:35-36)、第三巻(11:1-36:13)という具合に三巻構成となる。Cf. Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 343.

これが正しい場所がないことを示している。」この章句に代わって何が書かれるべきであったのであろうか？「そして民は主の耳に達するほど、不満を言った。」(民11：1 ff)

(民数記10：35に対するスイフレ84 [p.80])¹⁷

スイフレがどの写本を使っているかは明らかではないが、民数記の当該箇所にマソラ本文のような反転のヌンやヘブライ文字がない代わりに、点があったことが明らかである¹⁸。

ともあれ、反転のヌンの伝承は古く、マソラ（伝承）学派の活動（紀元6－10世紀）以前のソフェリーム（写本家）の時代（紀元2－5世紀）にまで遡ることになる。

この反転のヌンは、ヘブライ文字ヌンの形を取るまでに、いくつかの発展があったことが知られている。A. ドタン（Dotan）は、古代の資料では、反転のヌンは「ヌン」ではなく、「しるし」（**סימניות**）と呼ばれる単なる点、あるいは8世紀以前の場合には、そのしるしが角笛に似ていたので「つの」（**שיפור**）と呼ばれており、当該箇所に、「ヌン」のような子音文字があったわけではないと指摘している¹⁹。

一般的に言われていることは、反転のヌン（**נְּ**）は「点が打たれる」（**נקוד**）の省略形であろうということである。反転のヌンを記すことになった写本家は、当該章句を正しく際立たせるには点では不十分だと考えて、その点を「点が打たれる」を意味する「ニクード」（**נקוד**）の最初の文字「ヌン」（**נ**）に変えたと考えられている。その上さらに、テキストの子音文字「ヌン」と区別するために反転させたというのである²⁰。E・ヴェルトヴァイ

17 E. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 55. スイフレに関しては、トーブの英訳を訳出している。但し、Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 342, n.2のヘブライ語文参照。

18 Cf. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 55.

19 Dotan, “Masorah,” 1408. E・トーブ（Tov）によれば、ヘブライ文字のカフ（**כ**）が記されたこともあったということである。Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 54.

20 Cf. Kelley et. al., *The Masorah of Biblia Hebraica Stuttgartensia*, 34.

ン (Würthwein) も、ヌンが反転しているのは、それが見間違いによって本文と見なされないためであったと考えている²¹。

それでは、この反転のヌンの意味と機能はどのようなものであったのであろうか。この反転のヌンが「本文の錯簡を示す括弧」²²と呼ばれたりすることからも明らかなように、この反転のヌンがつけられている当該の章句は、その位置が錯簡的に問題であり、その位置を移動することが求められているということである。

民数記における反転のヌン

この反転のヌンの9回のうちの2回が出てくるトラーの中での民数記の場合、*BHS* では、民数記10章35節の前と36節の後に記されている²³。これまで見て来た反転のヌンの意味に従えば、民数記10章35-36節が錯簡的に問題視されていることになる。七十人訳では、民数記10章35-36節は、33節と34節の間に挿入されており、この説を裏付けていると言えよう²⁴。これに従えば、章句の順序は以下のようなになる。(●は反転のヌンの当該章句を示す。以下同じ。)

10 : 33 人々は主の山を旅立ち、三日の道のりを進んだ。主の契約の箱はこの三日の道のりを彼らの先頭に進み、彼らの休む場所を探した。

21 ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究—「ピブリア・ヘブライカ」入門—』、37-38。R. ウォンネンベルガー『ヘブライ語聖書への手引き—旧約テキスト批判入門—』、22も同様の見解を示している。

22 左近淑「第九章 本文」石田友雄他『総説旧約聖書』(日本基督教団出版局、1984)、590。

23 ラビ聖書では、反転のヌンを記す代わりに、10 : 35 の בְּנִסְעָה のベート (ב) の後のヌンと 11 : 1 の בְּנִסְעָה のアレフ (א) の後のヌンとを反転させている。

24 Cf. Alfred Rahlfs (ed.), *Septuaginta: Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes* (Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt, 1962), 233. ギリシア語のクムラン写本における疑問票のオベロス (obeilus) については、Cf. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 55.

- 10：35 主の箱が出発するとき、モーセはこう言った。「主よ、立ち上がってください。 あなたの敵は散らされ あなたを憎む者は御前から逃げ去りますように。」
- 10：36 その箱がとどまるときには、こう言った。「主よ、帰って来てください イスラエルの幾千幾万の民のもとに。」

10：34 彼らが宿営を旅立つとき、昼は主の雲が彼らの上にあった²⁵。

E・トーブ (Tov) が指摘するように、「主の箱」²⁶ について言及する35節が同じく箱 (アーク) について述べている33節の直後に来るのがどちらかと言えば自然であろう。このことは、「主の箱の歌」(35-36節) が元来この場所にあったのではなく、後代の付加であることを示唆する²⁷。マソラによれば、反転のヌンに囲まれたこの歌はどこか他のところに属する分たれた断片なのである²⁸。

詩編における反転のヌン

BHS では、詩編107編21-26節の各節、および40節の節頭にそれぞれ反転のヌンが記されている。C.D. ギンズバーグ (Ginsburg) は、38節と39節の

25 章句の引用は『聖書 新共同訳』(新共同訳)による。以下、特に断らない限り聖書の引用は新共同訳である。

26 「その箱」(אֲרוֹן)を新共同訳は「主の箱」、『聖書』(口語訳)は「契約の箱」と訳出している。

27 Cf. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 339. Baruch Levine, *Numbers 1-20: A New Translation with Introduction and Commentary* (The Anchor Bible; New York: Doubleday, 1993), 317-318.

28 Cf. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 339. なお, Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 343によれば, R. シメオンは, 民10:35-36が将来的にはここから取り除かれて適切な場所に移されるべきだと述べており, 後のタルムード学者は, その場所として民2:17「臨在の幕屋は, レビ人の宿営に囲まれて全宿営の中央を行進する。宿営しているときと同じように, それぞれの宿営は, その旗印の下に行進する。」の直後を考えたとのことである。

文意の流れが説明不能なので、40節を39節の前に移動すべきだとする²⁹。それを示せば以下のようになる。

- 107:36 飢えていた人々をそこに住ませ 人の住む町を固く立てられた。
- 107:37 彼らは野に種を蒔き、ぶどう畑を作り 作物を実らせた。
- 107:38 主が祝福されたので彼らは限りなく増え 家畜も減らされることはなかった。
- 107:40 主は貴族らの上に辱めを浴びせ 道もない混沌に迷い込ませられたが
- 107:39 不毛、災厄、嘆きによって 彼らは減って行き、屈み込んだ。
- 107:41 乏しい人はその貧苦から高く上げ 羊の群れのような大家族とされた。

ギンズバーグは、このような節の入れ替えにより、39節の主語「彼ら」が40節の「貴族ら」(**רִבְּרֵי**) によって補われて確定し、章句の文意的流れが改善されると主張する³⁰。BHS のアパラタスも、39節が40節の後に移動するように提案している³¹。しかし、ギンズバーグは、詩編107編のもう一つの反転のヌンである、以下に掲げる21-26節に関しては何の説明もしていない。

29 Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 344. ギンズバーグは、*ibid.*, 343 で、反転のヌンがあるのは、詩 107 の 23-28, 39 節と記しているが、*ibid.*, 344 では、移動されるべきは 39 節ではなく、40 節を 39 節の前に移動するように言っているので、343 の 39 節は 40 節のミスプリの可能性がある。

30 Ginsburg, *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*, 343-45. Cf. Leslie C. Allen, *Psalms 101-150* (Word Biblical Commentary; Waco, Texas: Word Books, Publisher, 1983), 60. なお、38 節の「彼ら」とは 36 節の「飢えていた人々」(**רִבְּרֵי**) || 41 節の「乏しい人」(**רִבְּרֵי**) である。

31 BHS の 40 節の反転のヌンには、マソラ・マグナの注の数字 (23) がついているが、下欄の 23 には Mp sub loco とあり、マソラ・マグナの編纂に携わった G. E. Weil が何を記そうとしたのかは不明である。なお、Mp sub loco については、拙訳・編『BHS のマフテアハ』(ヨルダン社, 1999), 89-90 参照。

(▲＝ラビ聖書)

- 107：20 主は御言葉を遣わして彼らを癒し 破滅から彼らを救い出された。
- 107：21 主に感謝せよ。主は慈しみ深く 人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 107：22 感謝のいけにえをささげ 御業を語り伝え、喜び歌え。
- ▲●107：23 彼らは、海に船を出し 大海を渡って商う者となった。
- ▲●107：24 彼らは深い淵で主の御業を 驚くべき御業を見た。
- ▲●107：25 主は仰せによって嵐を起こし 波を高くされたので
- ▲●107：26 彼らは天に上り、深淵に下り 苦難に魂は溶け
- ▲ 107：27 酔った人のようによろめき、揺らぎ どのような知恵も呑み込まれてしまった。
- ▲ 107：28 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと 主は彼らを苦しみから導き出された。
- 107：29 主は嵐に働きかけて沈黙させられたので 波はおさまった。
- 107：30 彼らは波が静まったので喜び祝い 望みの港に導かれて行った。
- 107：31 主に感謝せよ。主は慈しみ深く 人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 107：32 民の集会で主をあがめよ。 長老の集いで主を賛美せよ。

C. A.ブリッグス (Briggs) と E. G.ブリッグス (Briggs) は、彼らの注解書において、ラビ聖書の伝承に従って、23-27節 (28節ではなく!) に括弧の役割を持つ反転のヌンを認め、それらが正当な場所がないという初期マソラ学者の説を紹介し、その上で、この箇所多くの部分が書き込みの「注釈」(gloss) であると解している。そして、その注釈は23節の後半の「大海を渡って商う者となった。」から始まるのであるが、便宜上反転のヌンは23

節の節頭に置かれている、と解説している³²。他の注解者が、ここでの反転のヌンの意味は不明としている中で、このような解釈の試みは注目すべきであろう。しかし、本来、反転のヌンが本文の錯簡を意味していると考える者にとって、単なる「注釈」という解説は説得力に欠け不満が残る。

詩編107編は、33-43節を後代の付加とした場合、四部に分かれており、ラビ聖書における反転のヌンの伝承の方は、その第四部の最初の6節（23-28節）に反転のヌンがついていることになる。この箇所が文意的流れに何か支障を来しているかと問われても、そうだという明確な答えは出し難い。それでは、これを括弧で括ってなしとすれば、文脈的に意味がより自然になるかと言えば、そうとも言えない。23節以下の船で難破したという状況は、海の民ではなかったイスラエルの経験としては不適切とでも考えたのであろうか。

一方、レニングラード写本の場合は、第三部の重病になり癒された病人の17-22節の後半の21節（21節の「主に感謝せよ。主は慈しみ深く 人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。」は、詩107にくり返されるリフレーンの一つである〈8, 15, 31節〉）に始まって、第四部の26節へと股がっており、これをどうこうすることは文脈的にも無理がある。ラビ聖書の伝承にせよ、レニングラード写本の伝承にせよ、これをどこかに移動するという場合、それはどこになるのであろうか。

結局のところ、この詩編107編21-26節（あるいは23-28節）の反転のヌンの意味は現状ではよく分からないというのが正直な印象である。マソラ学者が他のしるしだったものを反転のヌンと誤解した可能性は皆無とは言えない³³。

ともあれ、マソラ注記である反転のヌンは、テキストに欠陥があるという、

32 C. A. Briggs and E. G. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms Vol. II* (The International Critical Commentary; Edinburgh: T. & T. Clark, 1951), 363-364.

33 Dotan, "Masorah," 1408 は、詩 107 の反転のヌンに関して様々な意見の存在を匂わせているが、具体的には何も紹介せず、その意見にコンセンサスがないことのみを記している。

初期写本家の本文批評作業の成果と言えるものであるが、と同時に、このような注記が勝手な本文の修正を阻止し、本文の精確な書写伝達に寄与していることも否定出来ない事実である³⁴。

参考文献

- Allen, Leslie C. *Psalms 101-150*. Word Biblical Commentary; Waco, Texas: Word Books, Publisher, 1983.
- Biblia Rabbinica: A Reprint of the 1525 Venice Edition Vol. I - IV* (ed. Jacob Ben Hayim Ibn Adoniya). Jerusalem: Makor, 1972.
- Briggs, C. A. and E. G. Briggs. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms Vol. II*. The International Critical Commentary; Edinburgh: T. & T. Clark, 1951.
- Cohen, A. *The Soncino Chumash: The Five Books of Moses with Haphtaroth*. Hindhead, Surrey: The Soncino Press, 1947.
- Dotan, A. "Masorah." in *Encyclopaedia Judaica XVI Ur-Z*. Jerusalem: Macmillan Co. 1971, 1401-1479.
- Frensdorff, S. *Das Buch Ochlah W'ochlah (Massora)*. New York: KTAV Publishing House, Inc., 1972.
- Ginsburg, C.D. *Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible*. New York, NY: Ktav Publishing House, Inc., 1966.
- Keil, C. F. and F. Delitzsch (tr. James Martin). *Biblical Commentary on the Old Testament Vol. I; the Pentateuch*. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, no date.
- Kelley, Page H., Daniel S. Mynatt and Timothy G. Crawford. *The Masorah of Biblia Hebraica Stuttgartensia: Introduction and Annotated Glossary*. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1998.
- 小林洋一訳・編『BHSのマフテアハ』ヨルダン社, 1999.
- Leiman, S. Z. "The Inverted Nuns at Numbers 10: 35-36 and the Book of Eldad and Medad." *JBL* 93 (1974), 348-355.
- The Leningrad Codex: A Facsimile Edition*. Michigan, Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 1998.
- Levine, Baruch. *Numbers 1-20: A New Translation with Introduction and Commentary*. The Anchor Bible; New York: Doubleday, 1993.
- Levine, Étan. "The Transcription of the Torah Scroll." *ZAW* 94 (1982), 99-105.
- 左近淑「第九章 本文」石田友雄他『総説旧約聖書』（日本基督教団出版局, 1984）,

34 マソラの聖書本文の精確な保存伝達の様々な手段については、Cf. Étan Levine, "The Transcription of the Torah Scroll," *ZAW* 94 (1982), 99-105.

- 585-618.
- Rahlf's, Alfred (ed.). *Septuaginta: Id est Vetus Testamentum graecae iuxta LXX interpretes*. Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt, 1962.
- Tov, E. *Textual Criticism of the Hebrew Bible*. Minneapolis, MN: Fortress Press, 1992.
- von Gall, August Freiherrn (heraus.). *Der Hebräische Pentateuch der Samaritaner*. Giessen: Verlag von Alfred Töpelmann, 1918.
- R. ウォンネンベルガー (松田伊作訳) 『ヘブライ語聖書への手引き－旧約テキスト批判入門－』 ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1992.
- エルンスト・ヴェルトヴァイン (鍋谷堯爾・本間俊雄訳) 『旧約聖書の本文研究－「ビブリア・ヘブライカ」入門－』 日本基督教団出版局, 1997.
- Yeivin, I. (tr. E. J. Revell). *Introduction to the Tiberian Masorah*. Masoretic Studies 5; Missoula, Montana: Scholars Press, 1980.